

研究所たより 研究所たより

昨年暮れの協同総研の忘年会でILO駐日代表の堀内さんとお話した際、労協にもっと国際的に活動して欲しいとハッパをかけられました。アメリカが各地を攻撃をするたびに「復興」問題が生まれ、各国際組織やNGOは対応に追われているようです。アフガンにせよイラクにせよ、やはり復興に必要なものは仕事であり雇用です。その意味では労働者協同組合の貢献できる分野も少なくはないでしょう。「アフガニスタンでは協同組合が必要なのでぜひ行きなさい」と言われ「子どもが小さいので…」と尻込みをしたら「何を言ってるの!」と一喝されました。

年末から年始にかけ実家に帰省し、久しぶりに家族と話をする機会がありました。私の父は、この10年ほどJICA(国際協力機構)の専門家やボランティアとしてアジア・アフリカなどに赴任し、現地の農業開発等の仕事をしており、なかなか話す機会もありません。現在は昨年よりパプアニューギニアに派遣されており、1ヶ月ほど一時帰国して正月明けすぐに出発してしまいました。

パプアニューギニアは、太平洋戦争で日本軍の戦場となった赤道の南の巨大な島です。パプアでは、有名なインパールやガダルカナルといった激しい戦闘地より圧倒的に多くの方が亡くなっています。驚くべきことに16万の日本兵が派兵され、生きて帰還したのは1万人、損耗率は94%ということです。そして、さらに悲惨なのは、死亡原因

のほとんどが戦闘ではなく飢餓やマラリア等の病気によるものという点です。明らかに補給や兵站の確保を無視した軍部の無理な作戦によって、ジャングルや山中を逃げ回り、戦わずして死んでしまったわけです。(ここまで書いて、何となく現在のイラク派兵の状況を思い浮かべて背筋が寒くなりました。)

戦後、パプアは独立を遂げるのですが、父の話では経済的には全く自立できておらず、なかなか厳しいものがあるようです。任期が2年のため、母も一緒に行っているのですが、白昼街中で「ラスカル」というピストル強盗が出現するので、自由に外出もままならないようです。強盗といってもゲリラのように組織されたものではなく、急激な近代化のヒズミの中で、仕事もなく豊かさを手にできない人々の手っ取り早い抵抗のようです。このような農業開発や国際援助の場面でも協同組合の役割は大きいとのことでした。

ひるがえって、現在の日本の中での協同組合の役割は何でしょうか?ある程度の豊かさを手にした私たちが、協同することの意味は何でしょうか?結局「どんな社会を望むか」ということを私たち自身がつねに考え、それに向かうツールとして「協同」を磨いていかなければ、すぐに錆びついてしまうのでしょうか。「どんな社会を望むのか」を考える1年にしたいと思います。

(菊地 謙)